



交通インフラの 重要性を再認識

千

字 万 感

国立大学法人信州大学
学長 濱田 州博

令和元年10月12日に日本に上陸した台風19号は、関東地方、甲信地方、東北地方などに記録的な大雨を降らせ、甚大な被害をもたらしました。長野県内でも千曲川の決壊、越水等により甚大な被害が出ており、これにより亡くなられた方に哀悼の意を表するとともに、被害に遭われた方に心よりお見舞い申し上げます。

さて、今回の台風被害で、最も衝撃的な映像だったのは、北陸新幹線の長野車両センターの浸水ではないでしょうか。長野～飯山間の線路も冠水したため、この区間の運転が再開されたのは、台風から約2週間後でした。また、合計10編成(120両)の新幹線が廃棄されることとなり、ダイヤの変更も余儀なくされました。一方、中央本線の特急あずさも土砂流入等の影響で2週間以上運転が取りやめられておりました。松本から東京への鉄道路線が一つ途絶えていたわけですが、長野駅経由や名古屋駅経由で行き来することができ、複数のルートがあることの重要性を再認識したところです。

ところで、私が上田市に赴任した1988年には、長野自動車道が豊科IC(現安曇野IC)まで開通ただけで、上信越自動車道も開通していませんでした。また、北陸新幹線(長野新幹線)も開業していませんでした。この30年間に、長野自動車道の全線開通、上信越自動車道の全線開通、北陸新幹線の金沢駅までの延伸など、交通インフラが大きく更新されました。今後、リニア中央新幹線の開業、松本市から福井市までを結ぶ中部縦貫自動車道や静岡市清水区から小諸市を結ぶ中部横断自動車道の実現により交通環境は変わっていくと思われます。一般道に関しても、有料トンネルの無料化や新規トンネル建設の計画があり、長野県内の交通インフラも充実することが期待されます。

ご存知の方が多いと思いますが、信州大学は、長野市、松本市、上田市、南箕輪村の4市村に5キャンパスを有するキャンパス分散型大学です。遠隔会議システムや遠隔講義システムが発達した今日でも、対面による議論は重要であり、キャンパス間の時間的距離が交通インフラの充実により短くなることは意味のあることです。

以上のように、今回の災害によって、交通インフラの重要性を再認識させられ、その充実が如何に我々に便利さを提供していたかを実感しました。